

九州と近畿における地名の類似性から見えてくるヤマト政権の思惑

—日本書紀編纂の目的と古事記の役割—

田中巖 橋本正浩 斎藤隆雄

はじめに

九州の朝倉中心の地名分布と近畿の纏向中心の地名分布の類似が奥野正男氏や安本美典氏によって指摘されています¹⁾。平群や巨勢、筑紫や春日などの位置関係は顕著ですが、これらの一致はどうして起きたのでしょうか。

奥野氏や安本氏は神武東遷によるものとしていますが、その理由としては明確な記述はありません。両氏とも土地の人々をすべて追い出した後の荒野に新たに地名をつけていったような状況を設定しているようですが、この地には従来から銅鐸文化が栄えており、人々も村も存在していたのは周知です。この地名の類似は山の中の話ではなく、人々の生活圏の中の地名なのです。彼らは遊牧民ではありませんから、現地の人々と融和しながら勢力を広げる以外に方法はなく、又記紀の記述も現地勢力との婚姻を通して勢力の拡大を行っています。この地名の類似は偶然ではなく強い意思に基づいたものでなければなりません。この論は、両地名の類似のその意思を探るべくまず、「日本国」誕生の時期を考察し、我が国の統治形態の変化を述べ、その上で白村江の戦いによる筑紫都督府の実態を考えながら、古事記・日本書紀の成立の過程を検証することによって「その意志」を解明したものです。

1. 我が国は「倭国」か「日本国」か

まず、我が国はいつまで「倭国」でいつから「日本国」になったかを考えて見ます。

中国の正史で我が国は「倭」或いは「倭人」の国と言われていました。(3世紀)

それが宋書では「倭国」と表記されています。(5世紀末)

しかし、日本書紀では神武帝の時代、紀元前から我が国は「日本国」だとしています。

一方、古事記では雄略帝が「倭国の王は私一人だ」と言っています。(5世紀頃の記事)

即ち、「古事記」と「日本書紀」で我が国の呼称が異なっているのです。

しかも、白村江の戦いのすぐ前に唐に行っていた伊吉連博徳の書では、「唐に沢山来ている外国人の中で『倭国』の客が一番立派だった」と書紀の中で述べています。我が国は『倭国』だったのです。(661年頃・7世紀) これらの事から日本書紀の主張にも拘わらず、中国の正史「旧唐書」に見られるように、7世紀末までは「倭国」、8世紀初頭からは「日本国」が我が国の国名であったとしてよいようです。

それでは、この、国名が変わった時期に「倭国」と「日本国」は戦ったのでしょうか。

少し遡った時期からの記紀に記述されている戦いの記事を見ても、「倭国」と「日本国」は戦っていないのです。

「倭国」と「日本国」が戦っていたとしたら、本来戦勝国であるはずの日本国の歴史書である「日本書紀・続日本紀」にその記述があるはずですが、どこにもありません。

即ち、我が国は戦わずして「倭国」から「日本国」になったのです。

2. 「九州」と「畿内」の意味

ここで、「九州」と「畿内」の言葉の語源と意味について考えて見ます。

「九州」は「王権の全土」の事であり、「畿内」は中国の場合「王宮を中心とした五百里四方」の事ですから、どちらもその中に「天子が居る」ことを意味しています。

孝徳紀大化2年正月に「初めに京を整備し畿内を定める」とあります。その「畿内」の範囲について「東は名張の横川、南は紀伊の兄山、西は赤石の櫛淵、北は近江狭々波の合坂山のそれぞれこちら側」とあります。正に、中国で言う「畿内」の定義を踏襲しています。更にその年の2月15日には「確かに都を遷してから未だ日は浅く、見回してみると(我々は)お客様状態である」ともあります。これは王権の中核だけが近畿に移ってきたことを如実に表しています。多くの民を引き連れて近畿地方に乗り込んで来てはいないのです。書紀によれば孝徳帝が畿内を近畿に設定する前には近畿に畿内はなかったと思われます。

一方で、崇神紀や欽明紀等に「畿内」の記述があることは、「畿内」を近畿に遷す前の「畿内」、即ち九州に倭国の中枢があった時の「畿内」を意味しているのか、あるいは「九州」という表記を「畿内・邦畿」に差し替えたものかもしれません。

3. 豪族政治から中央集権国家へ

我が国の統治形態の発展の過程を見てみます。

まず、中国南朝梁時代に書かれた宋書の記述による「倭王武」の列島内の支配状況はかなり信ぴょう性が高いと思われませんが、その倭の五王の時代は豪族政治でした。

倭王武は列島内に 121 国の支配下の国を持っていたとあります。倭王武は中国の南朝の配下ですから、中国の属国の王として、倭国内で 121 の国を支配していたのです。それぞれの国には「王・豪族」がいたと思われまから、当時の我が国は中央集権国家ではありません。

しかし、その後の安閑・宣化紀になると大量の屯倉の設置が記述されています。これは各地の豪族の所領の奪取を意味していて、この頃から中央集権化の動きが出てきたものと思われまから。²

これは亦、中国からの自立の動きとして捉えられます。それは「タリシホコ」の隋の煬帝にあてた挨拶や、二中歴の創設、十二階位制度、十七条憲法等に象徴されます。

中央集権化が順調に進んで倭国が安定した結果、孝徳帝の時に近畿に「畿内」の設置の必要性が出てきたのだと思います。

4. 我が国の命運を変えた白村江の戦い

さて、倭国は百済の要請により、半島に大量の軍を送り込んで唐と戦い大敗いたしました。その結果、663 年の白村江の戦いなどの敗戦以後、倭国の九州に唐による「筑紫都督府」が置かれ九州は唐の占領下におかれたのです。

その後、667 年から 676 年までの約 9 年間九州は中国唐の占領下におかれていたとみられまから。書紀には 664 年にすでに郭務悰の来朝記事が見えます。664～5 年から 10 年間以上占領されていた可能性もあります。

百済、高句麗を亡ぼした唐は 668 年に平壤に安東都護府を設けて二万の兵を置き、その下に九都督府を置いて羈縻統治を開始したとあります³。この時、旧百済領に熊津都督府、新羅領に鷄林都督府が置かれ、九州にも筑紫都督府として軍事拠点が置かれたようです。

天武が実権をにぎったのはそのさ中の 672 年です。(即位は 673 年)

当時は九州に唐の軍事拠点である「筑紫都督府」が置かれており、始めて他国に自国の領土を侵された我が国の人心は大いに乱れていたと思われまから。

列島全体が唐に支配されてしまうのではないかと言う不安もあったはずで。

このような人心の乱れを押さえ、我が国を一つにまとめるために、天武は我が国の歴史書「古事記」の編纂を思いついたようです。

古事記の序に天武が「私はそれぞれの家が持っている帝紀及び本辭はことごとく正実と違い、虚偽を多く加えられていると聞いている。今この時でも、その過ちが改められていない。そのよこしまな願いも幾年もたっていない。それを絶つことは云々」と言ったと書かれています。即ち「混乱に乗じた動き」が世の中に蔓延していたのでしょう。

天武はその国民の乱れを押さえ、国を一つにまとめるために古事記編纂を試みたようです。九州を失った我が国の人民を再度奮い立たせるための倭国の歴史書として、1. 大昔から大和(奈良)に始まった国である。2. 万世一系の由緒ある国である。3. 未だかつてどこにも朝貢をしていない国である、と言うコンセプトを掲げたのです。

他国の支配下に入ることを忌避する思いと、誇り高い倭国の民族意識を高める狙いを強く打ち出し、独立国としてのプライドを強く示す意図が込められたのです。

5. 新羅による唐の勢力の半島からの駆逐

この後しばらくして、新羅が半島の統一に乗り出し、武力で半島にあった「安東都護府」・「熊津都督府」・「鷄林都督府」を半島から追い出し、遼東迄引き揚げさせたのです。

この、唐の軍事拠点が遼東迄後退したのが 676 年です。当然この時「筑紫都督府」も撤退せざるを得ない状況になったようです。

ですから、郭務悰たちが我が国から引き揚げたのは 676 年頃の事でしょう。⁴

我が国は新羅のように武力で唐を追い出した記述は書紀にはありません。

我が国は 676 年頃に棚ぼた式に唐から解放されたのです。

こうなって、九州から唐の軍隊がいなくなれば、当初天武が意図していた「古事記」の意義は大いに薄くなり、その編纂は、その後 40 年近く放置されることになったのです。

6. 敗戦国「倭国」の置かれたアジアの情勢

我が国が「倭国」から「日本国」に名を変えた、七世紀末から八世紀初頭の唐は「世界帝国」とと言われるほどの隆盛を極めていました。

その頃の唐は、第三代皇帝の高宗（649～683）の時代、東の高句麗を亡ぼし、突厥の第一帝国も滅亡させ、トルコ族諸部から「天可汗（てんかかん）・世界皇帝」の称号を奉じられる等、則天武后の治世（武周 690～705）にかけて、その勢いは絶大なもので、アジアにおける文化・交易の中心地たる超大国だったのです。

このような唐と敵対して倭国が安穏としていられる状況ではなかったと思われます。

当時の状況は、唐の冊封のもとでも「統一新羅」として力をつけてきた、前の戦いで敵国だった半島勢力と超大国の「唐」に挟まれ「我が国の安全と発展」を目指す政権の置かれた立場は、後の明治維新前夜と酷似していたのではないのでしょうか。或いは「太平洋戦争敗戦後の日本」だったのかもしれませんが。

このような状況下でも我が国は独立国家として、超大国の唐との交流を進め、我が国を発展させてゆこうと考えたのは言うまでもありません。唐の冊封だけは避けたかったのです。我が国が「倭国」のままで唐と交流しようとするれば、唐は「戦勝国」であり、我が国は「敗戦国」ですから、唐との交渉は不利になるのです。

そこで倭国は「唐への朝貢国家として、唐の属国にならないための秘策」を練ったのです。

7. 起死回生の我が国の政策

先ず、唐に対し使いを遣って、我が国は「日本国」で「倭国」ではないと主張し、「日本国」の存在を唐（武周）に認めさせることにしたのです。同時に、「倭国」は「小国の日本国」が併呑したと主張することにしたのです。

それは旧唐書などの記述から、唐（武周）によって認められたのです。

そこで、我が国の政権は次の策である「日本国」の歴史書である「日本書紀」の編纂に取り掛かったようです。我が国が「倭国」ではない「日本国」として、この列島に存在していたことを裏付けるためです。その歴史書のストーリーは

「日本」は大昔から「倭国」とは別の国であり、当然、そこには歴代の中国王朝と「倭国」として交流のあった「卑弥呼」も「倭の五王」や「タリシホコ」も居なかったことを「唐」にはっきりとわかってもらうということです。

即ち、唐の朝廷に見せるための歴史書を漢文で編纂することを試みたのです。

この時、我が国の政権は、その編纂を放置していた「古事記」のコンセプトが使えると判断したようです。即ち、古事記が「九州発祥の倭国とは違う倭国」として書かれている点と、そこに示されている皇統が使えることに気が付いたようです。そこで急いで和銅四年九月（711）太安万侶に「古事記」の提出を求めたのです。

太安万侶は要請からわずか 3 か月後の和銅五年正月 28 日に上進しています。

8. 「日本国」の誕生と、裏付けのための「日本書紀」。地名の偽装の必要性。

これらが意味するところは「倭国の王権自身が九州王朝に由来する倭国の歴史書を近畿中心の日本国の歴史書に書き改め日本国とした」ということを明らかに示しています。

しかし、当然のことですが、その倭国の歴史書の中には、倭国の王権の中核にある地名が頻出するのです。そのままでは、折角「倭国」とは別の国「日本国」を主張しても、日本書紀がその証明にならない恐れが出てしまうのです。

そこで九州にあったかつての倭国の中枢の地名のいくつかを近畿に設定する必要に迫られたのです。「唐」に「倭国」とは違う「日本国」を主張して認めさせた以上、それはやむをえない措置だったのです。

これこそが最初に挙げた「九州と近畿の地名の類似」の原因であり理由だったのです。亦、倭国との決別のために、唐朝に対しては「評」を「郡」と表記してみせています。国内的にはどちらも「こほり」ですから、国内の混乱はありません。この手法は「日本書紀」で「日本」を「やまと」と読め、としているのと同じなのです。国内的には「日本書紀」は「やまと」の歴史書なのです。決して国名を変えてはいないのです。それなのに、旧唐書は「倭国」と「日本国」を別の国と認めています。これこそが、我が国の政権の思うつぼだったのです。

9. 小国日本が倭を併呑した

尚、旧唐書にある「小国日本が倭を併呑した」と言う記述はどこから来たのでしょうか。日本書紀・続日本紀には「日本国はもと小国」というような記述はありません。書紀編纂で、最も問題だったのが白村江での戦いの記事です。この記事の中で書紀は日本軍が戦ったとはっきり書いているのです。

半世紀ほど前の戦いは多くの我が国の戦闘員が死亡して敗戦した歴史的な出来事です。

しかも、その後唐の占領軍が九州を占拠していたのです。

さすがに時の政権もこの記事を削除するわけにはいかなかったものと思われます。今までの流れからいくと、この戦いは倭国と唐の戦いですから、唐朝に対しては、戦いの記事に「日本軍」の記述はなくしたいところです。

勿論、「日本」は「やまと」と読むのですから国内的にはこの記述は問題がないのです。

そこで、我が国の時の政権は唐朝に対して、唐朝が新羅との戦いで安東都護府を遼東に後退せざるを得なくなった後、即ち郭務悰が去った後のこの**筑紫都督府（九州倭国）を日本国が併呑**したというストーリーを考えたのだと思われます。中国唐が占領していた倭国九州を日本国が併呑して、今は列島全体が日本国であると主張したのです。

しかも、唐と戦ったこの日本軍の記述を指摘された時に、この時はまだ、倭国の軍として**小国の日本軍**は派遣させられていた、と説明したのだと思われます。

ここに「日本はもと小国」という表現が新・旧唐書の中に現れたのでしょう。⁵

10. 日本書紀は「倭国」内に「日本国」があったというアリバイ工作のための歴史書。

日本書紀にある多くの唐との交流記事は「唐朝と倭国の国交」として唐朝の記録に残っていないような、唐朝があずかり知らない「倭国と唐の交流記事」を巧みに選んで、あたかも日本国と唐との交流であったかのように載せています。「間違いなく『日本国』が列島に存在していたという唐朝に対するアリバイ」の為です。

また、阿倍仲麻呂達が唐に渡ったのは、この方針が固まって日本書紀完成の少し前の717年の事です。彼は我が国のその方針を十分に理解して海を渡ったのです。

或いは、この日本政府の立場をより明確に「唐の朝廷」に認識させる密命も帯びていた可能性があったとも思われるのです。彼は唐の科挙試験に合格したとも言われており、唐の官僚となっています。当時の我が国の政権はこの難しいかじ取りをやり遂げたのです。本論のテーマである「九州と近畿の地名の類似」がこの時期のヤマト政権の大胆で無謀とも思えるかじ取りの動かぬ証拠として後世に残されていたのです。